

南薩摩研修旅行記

中 村 由 子

(会員・弥生町江良)

昭和五十八年十一月二十六日、弥生町歴史文会の一行二十三名は、大きく飛躍して初めての県外旅行、一泊二日の予定で、九州南端の薩摩地方の研修旅行に向う。

私は初めての薩摩入りで、書き度い事が多いが二、三の事項に限り、合間の伴奏抜きで本題に入ることにしよう。

一、知覧

日本一の知覧茶はいかが!! 売店の知覧茶と、広い茶園を見たり、考えたりしながら一応特攻隊遺品館に登った。

知覧茶は、恵まれた気象条件と、地勢の中で手厚く栽培され、色、香共に日本一の折紙つきという。明治五年頃より作られている由、会員の皆さんもお土産にと買った人も多かった。広い広い茶園はきれいに刈りこまれ、

十分な管理が行われ、暖かい四月の出番を待って、冬の一休みというところであろうか。

知覧特攻隊基地

知覧に太刀洗陸軍飛行学校知覧分教場が開設されたのは昭和十六年で、陸軍少年飛行兵の操縦教育のためであった。その後、拡充されてきたが昭和十九年のフィリピン戦頃から、沖繩戦に対処するため、海軍の大隅半島の鹿屋基地と並んで、ここ知覧は陸軍最前戦の特攻隊基地となり、一〇二六柱の若い勇士が、雲流るる果てはるかに逝って帰えらざる壮途につかれた鬼哭の地である。

遺品館を廻って、生々しい数多の遺品、遺書に接し、黙読して涙をソット拭う人が多かった。早や夕刻というのに、この日も夥しい參觀者であった。昭和三十年には特攻平和観音堂、昭和四十九年には、特攻隊員の銅像、

昭和五十年には特攻遺品館が建設された。

毎年五月三日の特攻遺霊祭には、全国各地より多くの参拝者が訪れるとのことである。

遺品館屋上でも、損傷のひどい海軍の零戦特攻機が一機展示されており、競って写真に納まり、悲惨なこの戦争を忘れまいとする様子であった。

屋外に出ても、特攻機が展示されていて、四十年の時の流れの中で、何かを語りげであった。英霊よ永久に安かれと御冥福を祈ってここを去ることにした。

武家屋敷

徳川幕府の一国一城制度により、戦国時代の城砦が多く廃止された。薩摩藩では一〇二の外城を作り、防衛の役割を果たすことにした。

一外城は数村ないし、数十村をふくむもので、麓（ふもと）とも、府下とも称する地域に地頭仮屋があって、外城衆（郷土）が居住していたといわれる。外城衆は身分は武士であるが、日頃は農事に励んでいて、本当の武士より身分が低いものであったと聞いている。

知覧城主は島津の支族として、二十二代藩政に参画、五六三年の治政の間に知覧独特な気風がつくられたとい

う。この武家屋敷は伝統的建造物群保有地区に指定されている。会員一行は、二つのグループに分かれて保存地区に第一歩を踏む。

狭い道路の両側に豪華な武家屋敷がズラリ並び、石垣をつくり、その上にはイヌマキのきれいに刈りこまれた生垣が「遠路ようこそ、寛保、宝暦、明和の御代を偲んで下さい」と言いたげである。

道中、石垣は当時のものという。その昔、御家老や武士共が通ったこの道を一寸胸を張って歩いてみた。御家老は御駕籠の中で、さぞ肩を怒らしていたことであろう。幾つかの武家門をくぐる。各の屋敷が墨のように防衛壁に見える。名庭園ばかりだ。巨岩、奇岩、怪石がサツキや松梅の老木と配置よく、枯山水庭園としてその表現は絶妙である。遠くにかすむ山のごと、又深山に高く低く落つる滝、溪谷の如く、見れば見る程変化にとんで、当時の名工の技術がうかがえる。何れの庭園も表現が豊かである。もっと、ゆっくり見度い武家屋敷である。

夕闇迫る武家屋敷群を後にして、宿舎みどり荘を目指してパスの人となった。

二、丹後の局の墓

薩摩を語る時、最も重要な人物である丹後の局にスポットを当て、みよう。

『三州文化』の原三千子女史の手記を要約して紹介することにする。



丹 後 局 の 墓

企郡の豪族、比企能員の妹、父は法師澄雲、栄子の母は源頼朝のばあやで、頼朝とは乳兄弟の仲良しだが年頃になって頼朝に愛され身重となる。正妻、政子が気づき殺意のあるこ

とを知った頼朝は、家来に命じ栄子を西国に旅立たせた。栄子は摂津住吉の宮の森で男子を出産した。雨のしとしと降る夜お産のにおいに集まる狐のよだれの明りでお産をした話は有名である。

翌日、住吉参拜の公卿近衛基通に助けられ、近衛家に留る。赤ん坊は忠久と命名され、育てられた。

栄子は程なく、後白河法皇の近臣業房に嫁いだが、治承二年（一一七九）業房は平氏に殺された。夫の死後は法皇に仕え丹後の局と称して愛を受けた。

文治二年（一一八五）武家政治がはじまる。近衛家に育ち、忠勤を認められた忠久は、文治三年（一一八七）地頭職に任せられ、本田貞親一門を連れて薩摩に下向した。忠久二十二才で、谷山、伊佐、日置を拝領したのである。

局は後白河法皇崩御の後、出家して山科を拝領した。局は東山の浄土寺に隠栖したが、民部大輔惟宗広言と結婚し、惟宗姓を名乗る。

承元元年（一二〇七）、広言と共に忠久を慕い薩摩に下向、鍋ヶ城に隠栖した。嘉禄二年（一二二六）、局は八十才を以て逝去した。局の墓は来迎寺にいつらわれ、

天保年間、花尾神社の島津家墓地に分骨された。

陰謀や争いの多い世代を乗り切り、男四名に愛され八十才の生涯を静かに市来の里に閉じた。

私の頭に浮かぶ丹後の局像は、上背のある、少し丸々とした美貌の持主で、英智にたけたとまではゆかぬが女大夫と考えられる。その半面身体の全面から発散するあざっぱさは、一度媚びると男性はその魅力のとりことなる。局自身も男性好みのタイプで、精神力もプラスして当時八十才の長寿を全うしたのではあるまいかと思う。

来迎寺墓地は坂の上の台地にあった。来迎寺跡は草むして伝承によって知るばかりである。中程に既に壊われた玉垣の中に二基の石塔があった。三重の層塔が、丹後の局で、一基は局が帰依した僧永金の墓と伝えられる。

今回の旅行で、多数の写真が希望者に頒布されたが、丹後の局の写真のみは全員が希望したという。彼女の数奇な運命にひかるゝものがあつたのではあるまいか。

三、懐良親王御陵

帰途は思いもかけず出水で六千羽の鶴の大群を観覧することができたが、更に八代市では郊外の森の中に鎮ま

る征西大將軍の宮懐良親王御陵を拝観することができた。

六百五十年も昔のことである。世の中が南朝、北朝という二つの天子に分かれて争うすさまじい時代に、九州を南朝方とするため、後醍醐天皇の命によって、九州に下向された懐良親王は随分と御苦労なされて、正平十六年頃から凡そ十年間は九州を制圧されて、南朝の天下とされたのであるが、北朝方の今川了俊が九州探題に派遣されてからは、南朝方も落ち目となり、親王もわびしい晩年であつたらしいと車中で説明があつた。

懐良親王は元中三年（一三八五）三月二十七日、五十才を以て薨じられてここに葬られた。

土盛りの円墳が木立の向こうの薄暗いあたりに拝見された。広い墓地は時恰も銀杏散り敷く頃で、往時を偲びわびしさ一入であつた。

帰途を急ぐ私達は、再び九州自動車道を走り、熊本で五七号線に移り八時前弥生に帰着してこの旅は終つた。